行き過ぎた言動。ただし相手は五十六歳

庫発りべるき

このソフトウェアは体験版です

〈この物語はフィクションです。実際の事件・人物・団体などとは関係ありません〉

俺が通う中学校がそこにある。そして男子生徒たちが会話をする。

「上原もずいぶんとすごいことをしたもんだよな」

「ああ」

俺の知らないところで交わされている会話。俺の苗字が登場する。

職員室。そこに俺がいる。先生たちの俺を見る目が……

どう表現すればいいんだろうな。わからねえよ。

はっきり言えることが最低一つはある。職員室の空気が重々しいのは、俺に関することで教師たちが深刻になっているためだ、ということ。

俺は言った。自分のしたことは確かに問題行動である。相手に攻撃行為を加えたのも事実である。しかし、さすがに相手だって悪いのではないか。あれだけのことをしたのだから、と。

そこにいる教師の一人は俺にこう答えた。言いたいことはあるだろうが、やってしまった行為はマズイ、と…

俺は今後のことを考えていた。どんなことが自分がとるべき行動になるのか、ということを。

反省文を書くことになりそうだ。四百字の原稿用紙何枚分になるのか。

自分の立場で反省文というのは、なんかしっくりこない。そんなことを考えていると、教師の一人が俺に一声掛けてきた。

「校長。とにかく、近いうちに各方面に説明しなければなりません」

そう、俺はこの学校の校長先生。上原信明、五十五歳。自分のしたことに対する反省文の文章も、相応のものを書かなくてはならない。

そもそも反省文という言い方も変かも。ていうか間違っているし。

始末書、だよな。

とりあえず職員室での出来事についてはいったん区切りをつけて、校長室へと向かった。

校長室の自分の机の上で、俺は書類を広げていた。

この学校は日本のある都道府県の市が関わる公立の中学

校。早い話が市町村という意味での市立中学校。
俺は立場上、その市の教育委員会からいろんな書類を受け取ることが多い。今目を通そうとしているものもそのひとつ。
まずこれは、体罰禁止についての通達。
これは先生方をドン引きさせるような言動を俺が取ってしまう前に出されたもの。
あれからどのくらいの時が経っただろうか。教師や部活動の指導者が指導と称してとんでもない言動で生徒に危害を加えたり、精神的に追い詰めてボロボロにしてしまったケースが全国あちこちで判明した。
こういったことが問題視され、全国の学校に体罰禁止の徹底が出された。
今の自分の状況を考えながらこれを読むと、改めて複雑な心境になる。
体罰を肯定する説によく見られる現象として、被害を受けた児童・生徒も悪いと言ったり、児童・生徒のほうが悪いのだから批判を言わず受け入れるべきだというものがある。
もっともこれについては、児童・生徒の落ち度を強調して暴言や暴力を正当化しているといった見方をするものも多い。
そう、何て言っていいのか…相手が児童や生徒だったら、落ち度を強調したり本人のためを思ってやったこととすれば、最低でも一部の人からは擁護してもらえるものである。
それがいいか悪いかは別として……
だが、先ほど職員室で俺が語った、相手だって悪いということについては……その相手が五十六歳だってことだ。
相手だって悪いのだからと俺が攻撃を加えた対象は、五十六歳の男性だった。

〈続きは製品版で〉

発行　データコーディネートフォルダー